九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古詩「上山采蘼蕪」考

松浦, 崇
福岡大学 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9747

出版情報：中国文学論集. 12, pp.9-31, 1983-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

古詩「上山采蘼蕪」考

松浦崇

序言

梁の簡文帝の命を受けて徐陵が編纂した『玉臺新詠』は、戀愛詩のみを集めた詩集として特色がある。その巻一には漢代に作られた詩歌が、そしてその巻頭には、「古詩八首」という漢代無名氏の詩が收められている。

「古詩八首」の多くは、棄婦や思婦の情愛を切々と詠い、離別の悲哀を極めて深刻に表現している。たとえば、其二「凜凜歲云暮」は、夢の中の新婚生活を描いて、遠く旅に出た夫を思う妻の詩である。其三「冉冉孤生竹」は、結婚の約束をしながら結婚できないのを悲しむ若い女性の詩である。其四「孟冬寒氣至」と其五「客從遠方來」は、旅の途中の夫から手紙や贈り物が届けられ、一層悲しみを増すといった詩である。其六「四坐且莫誼」は、香爐の煙に託して、人の心の移ろい易いのを嘆いた詩である。其七「悲與親友別」は、親友との別れに際し

て、友情が永遠に變わらないようにと祈る詩である。其八「穆穆清風至」は、遠行の戀人との約束を全うしたいと願う詩である。

こうした深刻で重厚な詩が多い「古詩八首」の中にあって、次に擧げる其一「上山采蘼蕪」（以下、「蘼蕪の詩」と呼ぶ）だけは、かなり異質な感じを與える詩である。

1 上山采蘼蕪（『藝文類聚』三二引「古詩」、『太平御覽』五三一引「古樂府」、同九八二引「古詩」、並「蘼」作「糜」。）
2 下山逢故夫
3 長跪問故夫（『太平御覽』五二一引「古樂府詩」、「長跪」作「廻首」。）
4 新人復何如
5 新人雖言好（『藝文類聚』三二引「古詩」、「言」作「云」。）
6 未若故人姝
7 顏色類相似（『藝文類聚』三二引「古詩」、作「其色似其類」。）
8 手爪不相如
9 新人從門入
10 故人從閤去
11 新人工織縑（『太平御覽』八一四引「古詩」、「工」作「能」。）
12 故人工織素

13 織縑日一匹（『太平御覽』八一四引「古詩」、「匹」作「疋」。）
14 織素五丈餘
15 將縑來比素（『藝文類聚』三二引「古詩」、作「持縑將比素」。同八五引「古詩」、作「以縑持比素」。『太平御覽』八一四引「古詩」、作「以縑特比素」。）
16 新人不如故

この蘼蕪の詩も、男に捨てられた女性の悲しみを表現してはいる。しかしながら、見勝手な夫が前妻と後妻とを比較した部分はむしろユーモラスであり、重厚な他の七篇に比べて輕さが感じられる。

そこで、小論ではこの詩をとりあげてこの詩のテーマを再検討し、併せて、この詩が『玉臺新詠』の巻頭に收められていることの意義についても考えてみたい。

一

まず初めに蘼蕪の詩を、通説に從って讀み下すことにする。

1 山に上りて蘼蕪を采り、
2 山を下りて故夫に逢ふ。
3 長跪して故夫に問ふ、
4 「新人復た何如」と。
5 「新人は好しと言ふと雖も

6 故人の姝なるに若かず。
7 顏色は類ね相似たるも、
8 手爪は相如かず。
9 新人は門より入り、
10 故人は閤より去る。
11 新人は縑を織るに工なり。
12 故人は素を織るに工なり。
13 縑を織ること日に一匹、
14 素を織ること五丈餘り。
15 縑を將ち來りて素に比すれば、
16 新人は故に如かず。」

この詩の問題點は、第五句から第八句までの讀み方と解釋である。第五句・第六句で、「新人は好しと言ふと雖も、故人の姝なるに若かず」と、顏色の優劣を判斷していながら、第七句で、「顏色は類ね相似たるも」と、優劣を否定しているのは、明らかに矛盾している。

これについて、從來、次のような三つの解釋があった。一つは、第七句を言い直しとみて、そこに夫の心理の微妙な推移をみようとする考え方である。田中謙二氏は、この部分を次のように譯している。(1)

5新しい嫁さまは好いのだが、
6もとの嫁さまほど器量よしじゃねぇ
7いや、器量はまあ似たようなものだが、
8手さきの器用さはかなわんさ

二つ目は、第七句を假定（譲歩）とみて、「まあ假りに百歩譲って、顔の美しさは差がないとしても、云云」と譯す考え方である。辛嶋驍氏の譯は、次のようになっている。(2)

5なるほど新しい妻はよいのはよいが、
6やっぱりおまえの方が美人だった。
7まあ顔の美しさはかりにおつかつだとしても、
8手の働きはとてもおまえにおよばない。

三つ目は、第六句の「姝」を第五句の「好」と全く同じとみて、第五句・第六句を總括的評價とみる考え方である。(3) この説に従って第五句と第六句を譯せば、次のようになる。

5新しい妻もよいことはよいが、
6お前ほどよくはない。

これらの三つの解釋は、それぞれによさがあり、どれも誤りであるとは言い難い。第一の説に従えば、言い直しをするような優柔不斷さが、却ってこの男の性格をよく表わしているとも言える。第二の説に従えば、「手爪」の

優劣が一層強調され、解釋としては面白い。第三の說に從えば、第六句と第七句との矛盾が全くなくなる。しかしながら、以上の三つの說は、どれが正しいのか、絶對的な決め手に缺ける。また、何よりも氣になるのは、この詩のもつ輕さを拭いきれないということである。確かに、「素朴にして淡々とした歌いぶり」[4]に輕妙な面白さがあると言えないこともない。けれども、このような詩が『玉臺新詠』の卷頭に置かれている點に、強い疑問を抱く。しかも、「古詩八首」の其二・其三・其四・其五は、「古詩十九首」のそれぞれ其十六・其八・其十二・其十八に相當する名詩である。それらをさしおいて、蘼蕪の詩がなぜ其一に選ばれたのであろうか。更に言えば、第八句で「手爪」の優劣を言い、第十一句以降で再び「手爪」の優劣を詳しく述べているようだが、そうすると、第九句・第十句がどうしても浮いてしまう。詩の構成の面からも、何か落ち着きのなさを感じるのである。

二

そこでわたくしは、從來の通說とは全く違う讀み方と解釋とをここに示したい。それは、結論から先に言えば、第五句を「新人は言好しと雖も」と讀み、「新しい妻も言葉遣いはよいが」と譯す考え方である。

「雖十A十B」＝「AはBと雖も」の構文は珍しくない。因みに、『文選』の中から用例を擧げると、次のようなものがある。

○雖賢不乏世、……（曹植「求自試表」――卷二七）

○雖太平未洽、……（干寶「晉紀總論」――卷四九）

○雖太上至公、聖德無私、……（庾亮「讓中書令表」――卷三八）

ただし、「雖言」は、「雖云」や「雖曰」と同じように、「～と言ふと雖も」と讀むのが普通であろう。『藝文類聚』卷三二に引く「古詩」は、「雖言」ではなく「雖云」になっている。これであれば、「新人は好しと云ふと雖も」としか讀めない。しかも、「古詩十九首」の、

客行雖云樂、……（其十九）

と同一構文であるから、異を唱える餘地は全くなくなる。しかし、『藝文類聚』は恐らく誤まったのであろう。

「雖言」の用例は意外に少ない。南北朝以前の詩に使われたのは、次の二例だけである。

○雖レ言レ未二相識一、……（徐悱（妻劉氏）「答唐娘七夕所穿」――『玉臺新詠』卷六）

○雖レ言二萬里隔一、……（釋亡名「愛離」――『全北周詩』卷一）

これらの場合は、ともに「～と言ふと雖も」と讀む。

ところが、「雖言」を「～と言ふと雖も」と讀まない用例もある。詩ではないが、次の例がそれである。

劉尹目庾中郎、「雖言不愔愔似道、突兀差可以擬道。」

劉尹（惔）庾中郎（敳）を目すらく、「言は愔愔として道に似ずと雖も、突兀として差以て道に擬すべし」と。(5)

（『世說』品藻篇五八）

これは、「雖＋A＋B」＝「AはBと雖も」の構文であり、「言（言葉）は～と雖も」と讀む例である。したがって、靡蕪の詩の第五句を「新人は言好しと雖も」と讀んでも、全く誤りであるとはいえないだろう。

ただ注意しなければならないのは、第六句の「姝」の意味である。「姝、美色也」（『詩經』邶風「靜女」毛傳）などの訓詁に基いて、「姝」を容貌の美しさにとれば、「新しい妻も言葉遣いはよいが、お前の（容貌の）美しさには及ばない」となってしまう。これではつじつまが合わない。けれども、「姝、好也」（揚雄『方言』一・許愼『說文解字』）という訓詁もあるから、「姝」は「好」と全く同一とみても構わない。なぜ「好」でなく「姝」かと言えば、脚韻を合わせるためである。つまり、第五句と第六句は次のように譯せばよいのである。

5 新しい妻も言葉遣いはよいが、

6 お前の（言葉遣いの）よさには及ばない。

さてここで、もう一つ問題がある。それは、第八句の「手爪」の意味である。從來これを、「手先の器用さ」とか「手の働き」とか譯している。しかし、これを「指先の美しさ」とは解せないだろうか。手の美しさは昔から美人の條件の一つとされている。[6]「古詩十九首」にも、白く美しい手のことが詠われている。[7]蘼蕪の詩は二句ずつきれいな對句が並んでいるので、第七句と第八句も同一のことをのべているとみて、次のように譯すのである。

7 顏はほとんど差がないが、

8 指先の美しさはお前に及ばない。

こうすれば、詩の構成の面からもスッキリする。すなわち、第五句・第六句は「言（言葉遣い）」の比較、第七句・第八句は「顏色（容貌）」の比較、そして第十一句以降は機織りの能力の比較ということになる。

三

ところで、わたくしがあえてこのような解釋を示したのは、いわゆる「婦人の四德」の思想がこの詩の主要なテーマだと考えるからである。

四德（四行ともいう）とは、女性が備えていなければならない四つの德、すなわち、「德」・「言」・「容」・「功」をいう。『周禮』や『儀禮』にも見えるが、ここでは『禮記』の文章を引用しよう。

先嫁三月、……敎以婦德・婦言・婦容・婦功。（昏義篇）

鄭玄は四德について、次のように說明している。

婦德謂貞順、婦言謂辭令、婦容謂婉娩、婦功謂絲枲。

婦德とは貞順（貞淑從順なこと）を謂ひ、婦言とは辭令（言葉遣いがよいこと）を謂ひ、婦容とは婉娩（しとやかで美しいこと）を謂ひ、婦功とは絲枲（機織りができること）を謂ふ。（『周禮』天官九嬪注）

後漢の曹大家はこれを女性への誡めとして、次のように述べている。

女有四行、一曰婦德、二曰婦言、三曰婦容、四曰婦功。

夫云婦德、不必才明絶異也。婦言、不必辯口利辭也。婦容、不必顏色美麗也。婦功、不必技巧過人也。

幽閒貞靜、守節整齊、行己有恥、動靜有法、是謂婦德。

擇辭而說、不道惡語、時然後言、不厭於人、是謂婦言。

盥浣塵穢、服飾鮮潔、沐浴以時、身不垢辱、是謂婦容。
專心紡績、不好戲笑、潔齊酒食、以奉賓客、是謂婦功。
此四者、女人之大德、而不可乏之者也。然爲之甚易。惟在存心耳。古人有言、「仁遠乎哉、我欲仁而仁斯至矣。」此之謂也。（「女誡」――『後漢書』列女傳）

ここで注意してほしいのは、蘼蕪の詩の主人公が、婦人の四德を完璧に備えた女性である、ということである。まず、「婦德」について。

夫れ婦德と云ふは、必ずしも才明絶異ならず。……幽閒貞靜、節を守りて整齊、己を行ふに恥有り、動靜に法有り、是れ婦德と謂ふ。

蘼蕪の詩に「德」という言葉は見えないが（後述する如く、見えない所に意味があるのだが）、彼女ほど「婦德」を備えた女性も珍しい。元の夫に會った時、彼女は「長跪」（第三句）して最大限の敬意を表わしている。怨んではいないようだし、ましてや、嫉妬している樣子も全くみえない。それどころか、夫の身の上を心配しているのである。「新人復た何如」（第四句）といった言葉には、女性の貞淑從順さが凝縮されていると言えよう。

次に、彼女が「婦言」を備えていたことは、前章で示した新しい解釋に從えば、夫の口から語られていることになる。「女誡」は次のように言う。

婦言とは、必ずしも辯口利辭ならず。……辭を擇んで說き、惡語を道はず、時ありて然る後に言ひ、人に厭はれず、是れ婦言と謂ふ。

彼女の「新人復た何如」（第四句）という短い言葉は、「辭を擇んで說」いたものである。「新人は門より入り、故人は閤より去る」（第九句・第十句）を、彼女の言葉とみる說がある。[8] わたくしは、第五句以降はすべて夫の言葉とみた方が詩の流れとしてはよいので、その說をとらないが、その場合でも、夫や新しい妻に「惡語」を言っているのではない。彼女の言葉遣いのよさは、疑いの餘地がない。

次に、「婦容」の面でも劣っていなかったことは、これも夫が語っている。「女誡」は次のように言う。

婦容とは、必ずしも顏色美麗にあらず。……塵穢を盥浣し、服飾鮮潔、沐浴するに時を以てし、身に垢辱あらず、是れ婦容と謂ふ。

彼女はこの時、「蘼蕪」（第一句）を採りに山に出掛けていた。香り草を採ることは、身を清潔に保ち、貞節を守ることを暗示している。一說に、蘼蕪は古くから子供ができると信じられていた藥草であり、彼女は子供ができなかったために離緣されたのだという。[9] 蘼蕪を藥草とみるにしろ香り草とみるにしろ、彼女がしとやかで美しい女性であったことは間違いない。しかも、前述のように、「手爪」（第八句）を「指先の美しさ」ととれば、彼女がこの點でも勝っていたことは、更に歷然としてくる。

最後に、彼女が「婦功」の上でも卓越していたことは、これも夫が詳しすぎるほど語っている。「女誡」は次のように言う。

婦功とは、必ずしも技巧人に過ぎたるにあらず。……心を紡績に專らにし、戲笑を好まず、酒食を潔く齊へ、以て賓客に奉ず、是れ婦功と謂ふ。

彼女が機織り以外の仕事にも秀でていたであろうことは、想像に難くない。

四

さて、このようにみてくると、「德」・「言」・「容」・「功」が、順序通りに詠み込まれていることがわかる。そこで、作者は意圖的に並べて理想的な女性像を描いたのではないか、という假説が成り立つであろう。なお、わたくしは、蘼蕪の詩は二解に分かれるのではないかと考えている。それをわかりやすく示せば、次の通りである。

第一句・第二句……前半部の導入句
第三句・第四句……德
第五句・第六句……言
第七句・第八句……容
第九句・第十句……後半部の導入句
第十二句・第十二句
第十三句・第十四句　功
第十五句・第十六句

この詩で重要なのは、夫が四德のうちでも最も大切な「德」のことに全く觸れず、最後の「功」について、最も多く言葉を費している點である。

『世説新語』に次のような二つの逸話がある。一つは許允の話である。

許允婦、是阮衞尉女、德如妹。奇醜。交禮竟、允無復入理、家人深以爲憂。會允有客至。婦令婢視之、還答曰「是桓郎。」桓郎者、桓範也。婦云、「無憂、桓必勸入」。桓果語許云、「阮家既嫁醜女與卿、故當有意。卿宜察之。」許便回入內、既見婦、卽欲出。婦料其此出、無復入理、便捉裾停之。許因謂曰、「婦有四德、卿有其幾。」婦曰、「新婦所乏、唯容爾。然士有百行、君有幾。」許云、「皆備。」婦曰、「夫百行以德爲主。君好色不好德。何謂皆備。」允有慚色、遂相敬重。

許允の婦は、是れ阮衞尉（共）の女、德如（侃）の妹なり。奇だ醜し。交禮竟はるも、允復た入るの理無く、家人深く以て憂ひと爲す。會たま允に客の至る有り。婦、婢をして之を視しむるに、還りて答へて曰く、「是れ桓郎なり」と。桓郎とは、桓範なり。婦云ふ、「憂ふる無かれ、桓必ず入るを勸めん」と。桓果して許に語りて云ふ、「阮家既に醜女を嫁して卿に與ふ、故より當に意有るべし。卿宜しく之を察すべし」と。許便ち回りて內に入りて、既に婦を見、卽ち出でんと欲す。婦、其の此に出づれば、復た入るの理無しと料り、便ち裾を捉りて之を停む。許因りて謂ひて曰く、「婦に四德有り、卿其の幾有りや」と。婦曰く、「新婦の乏しき所は唯容のみ。然して士に百行有り。君幾有りや」と。許云ふ、「皆備れり」と。婦曰く、「夫れ百行は德を以て首と爲す。君は色を好みて德を好まず。何ぞ皆備れりと謂ふや」と。允慚づる色有り、遂に相敬重す。（賢媛篇八）

許允は、結婚式の當日、妻があまりに不美人であったために、部屋から逃げ出してしまった。女性の「德」をみる前に、「容」だけで判斷したのである。妻から、「君は色を好みて德を好まず」と批判されたのも仕方ない。

もう一つは荀粲の話である。

荀奉倩與婦至篤。冬月、婦病熱、乃出中庭、自取冷還、以身熨之。婦亡、奉倩後小時亦卒。以是獲譏於世。奉倩曰、「婦人德不足稱、當以色爲主。」裴令聞之曰、「此乃是興到之事、非盛德之言。冀後人未昧此語。」

荀奉倩（粲）は婦と至って篤し。冬月、婦の熱に病むや、乃ち中庭に出で、自ら冷を取りて還り、身を以て之を熨せり。婦の亡ずるや、奉倩も後小時にして亦卒す。是を以て譏りを世に獲たり。奉倩曰く、「婦人は德稱するに足らず、當に色を以て主と爲すべし」と。裴令（頠）之を聞きて曰く、「此は乃ち是れ興到の事にして、盛德の言に非ず。冀くは後人未だ此の語に昧まされざれ」と。（惑溺篇二）

荀粲は、妻が美人であったために、身を犧牲にして死んでしまった。女性は「德」などどうでもよく、「色」がすべてだと考えていたからである。彼も裴頠らから批判されている。

これに對して、蘼蕪の詩の男は、「言」や「容」も問題にしてはいるが、主として「功」の面から女性をみている。「功」、つまり勞働生産性の優劣は、「容」の優劣以上にはっきりしている。縑を一日に一匹（四丈）織る新人と、縑より上等の素を五丈餘りも織る故人。どちらが勝れているかは、「新人は故に如かず」（第十六句）という男の言葉を待つまでもない。彼も結局、女性の一番大切なものが「德」であるということをわかっていないのである。彼の發言の中には、「言」・「容」・「功」のことはあるが、「德」のことは一言も觸れられていない。

五

さて以上、蘼蕪の詩のテーマについて考えてきた。この詩が「婦人の四德」の思想を背景にもった詩であるとするならば、決して輕い詩ではない。むしろ、他の七篇にも劣らない重厚な詩であったと言える。

それでは、この詩が『王臺新詠』の卷頭に收められていることの意義について考えてみよう。

中國人は、詩集や文集を編む場合、何を選んで何を最初に載せるのか、非常に氣を遣う。たとえば『文選』は、詩よりも賦を、賦の中でも班固の「兩都賦」を、卷頭に置いている。それは、昭明太子が賦を最も重要な文體と考え、壯麗な京都の賦に最高の文學的價値を認めていたからである。班固の文學觀に深く共鳴していたことも、その一因と言えよう。(10) また、詩の順序にしても、束晳の「補亡詩」を初めに置いている。これも、詩經の傳統を繼承しようとする昭明太子の文學觀の反映である。

周知のごとく、『玉臺新詠』は『文選』に對する強い對抗意識の下に編まれた。(11) 『玉臺新詠』の順序は、一應時代順になっている。しかし、蘼蕪の詩を選んで初めに置いたのは、これが單に時代的に古いという理由だけからではない。『玉臺新詠』の編纂を命じた簡文帝は、實は、蘼蕪の詩を非常に愛好していたらしいのである。

齊以前の詩人たちは、蘼蕪の詩に對してほとんど興味を示していない。因みに、この詩を典故にした詩を強いて擧げれば、次のわずか三篇だけである。

①新人雖可愛、無若故所歡。(曹植「浮萍篇」)

②重新而忘故、君子所尤譏。(徐幹「室思詩」――『玉臺新詠』卷一)

③相逢詠蘼蕪、辭寵悲團扇。(謝朓「雜詩」其二　同主簿怨情――『玉臺新詠』卷四)

ところが、簡文帝は、實に六篇もの詩の中で、次のように典故として用いている。

①掩閨泣團扇、羅幌詠蘼蕪。（「有所思」）

②秋風與白團、本自不相安。
　新人及故愛、意氣豈能寛。（「怨詩」）

③出妻工織素、妖姫慣數錢。（「雍州十曲抄」三首　其三　大堤）

④東方千騎從驪駒、更不下山逢故夫。（「採菊篇」）

⑤楊柳葉纖纖、佳人懶織縑。（「春閨情」）

⑥故人雖故昔經新、新人雖新復應故。（「和蕭侍中子顯春別」四首　其二）

特に⑥の句には、蘼蕪の詩の女性に對する同情の氣持が強く感じられ、興味深い。簡文帝の影響かどうかは斷定できないが、同時代の梁陳の詩人たちも、競って蘼蕪の詩を典故に用いている。その例を次に擧げる。

①誰能憐故素、終爲泣新縑。（蕭子雲「春思」）

②寧復歌蘼蕪、唯聞歎楊柳。（王筠「和吳主簿」六首　其三　遊望二首　其一）

③誰家蕩舟妾、何處織縑人。（鮑泉「雜詩」二首　其二　落日看還）

④行行春逕蘼蕪綠、織素那復解琴心。（江總「雜曲」三首　其一）

⑤奈許新縑傷妾意、無由故劍動君心。（江總「怨詩」二首　其一）

⑥偏著故人織素詩、願奏秦聲采蓮調。（江總「内殿賦新詩」）
⑦無復專房日、猶望下山逢。（何曼才「爲徐陵傷妾」）
⑧幽人披薜荔、怨妾採蘼蕪。
紫巖無暮雨、何時送故夫。（釋惠標「詠山」三首　其二）

そして次のように、蘼蕪の詩を模擬の對象とした詩まで產まれている。

①入堂値小婦、出門逢故夫。
含辭未及吐、納袖且踟躕。
搖玆扇似月、掩此淚如珠。
今懷固無已、故情今有餘。（湘東王繹「戲作豔詩」――『玉臺新詠』卷七）

②出戶望蘭薰、褰簾正逢君。
斂容纔一訪、新知詎可聞。
新人含笑近、故人含淚隱。
妾意在寒松、君心逐朝槿。（王僧孺「爲何庫部舊姬擬蘼蕪之句」――『玉臺新詠』卷六）

③留故夫、不峙躇。
別待春山上、相看采蘼蕪。（王筠「劉孝綽元廣州景仲座見故姬」――『玉臺新詠』卷九）

そして更に注目すべきは、班婕妤の「怨歌行」と對比させた詩が非常に多いことである。すでに引用した謝朓の

「雜詩」其二、簡文帝の「有所思」・「怨詩」のほかに、次のような詩がある。

①適言新作裂紈詩、誰悟今成織素詩。（湘東王繹「春別應令」四首　其三　門前楊柳）

②新縑疑故素、盛趙蹇衰班。（劉孝綽「遙見鄰舟主人投一物衆姬爭之有客請余爲詠」）

③空勞織素巧、徒爲團扇辭。（劉孝儀「閨怨」）

④裁紈終委篋、織素空有餘。（溫子昇「結襪子」）

班婕妤の「怨歌行」は、『文選』にも『玉臺新詠』にも收められている名作である。これと對にしたということは、內容的に似ているということも一つにはある。男に捨てられた、あるいは捨てられようとしている女性を描いたという、內容の類似性である。しかし、見方をかえれば、蘼蕪の詩に對する評價が急速に高まったとも言えるのである。

六

それでは、簡文帝はなぜ蘼蕪の詩を好んだのだろうか。恐らく彼は、この詩をいわゆる「豔詩」の典型もしくは原點とみていたのではないか、とわたくしは考えている。

『玉臺新詠』が豔詩や豔歌を集めた詩集であることは、次の徐陵「玉臺新詠序」にも明記されている。

但往世名篇、當今巧製、分諸麟閣、散在鴻都。不籍篇章、無由披覽。於是燃脂暝寫、弄筆晨書、撰錄豔歌、凡爲十卷。

曾無忝於雅頌、亦靡濫於風人。涇渭之間、若斯而已。

但し往世の名篇、當今の巧製は、諸を鱗閣に分かち、散じて鴻都に在り。篇章に籍せざれば、披覽するに由無し。是に於て脂を燃やして瞑寫し、筆を弄して晨に書し、豔歌を撰錄し、凡そ十卷と爲す。曾ち雅頌を忝すこと無く、亦風人を濫すこと靡し。涇渭の間、斯の若きのみ。

豔詩は、「つやっぽい詩」、あるいは「なまめかしい詩」とは限らない。小尾郊一氏は言う。(12)

女性の情愛、女性の姿態、女性の用いる器具等、女性に關することを歌った詩が豔詩であり、それを集めたものが玉臺新詠である。

森野繁夫氏は、靡蕪の詩について、次のように述べている。(13)

これは「玉臺新詠」の冒頭に置かれた作品で、男の親が無理に別れさせたものであろう、いまだに相手を忘れかねている二人の男女、ことに女の嘆きを詠ったものである。いわゆる「豔歌」らしくない作品であるが、徐陵はなぜか此の詩で詩集の冒頭を飾る。

靡蕪の詩を、「いわゆる『豔歌』らしくない作品」というのは誤解である。すでに引用したが、靡蕪の詩を模擬した湘東王繹の詩の題名が、何と、「戲作豔詩」となっているのである（二五頁）。湘東王蕭繹は、簡文帝蕭綱の弟である。當時、靡蕪の詩が「豔詩」の典型とみなされていたことは、間違いない。

梁簡文爲太子、好作豔詩、境内化之、浸成俗、謂之宮體。晚年欲改作、追之不及。乃令徐陵爲玉臺集、以大其體。

梁の簡文太子爲りしとき、好みて艷詩を作り、境内之に化し、浸ます俗を成し、之を宮體と謂ふ。晩年改作せんと欲し、之を追へども及ばず。乃ち徐陵をして玉臺集を爲らしめ、以て其の體を大にす。

（劉肅『大唐新語』卷三）

これは、『玉臺新詠』編纂の事情を傳える唯一の資料である。ここで重要なのは、晩年、「宮體」の流行を改めようとしたが、できなかったので徐陵に『玉臺集』の編纂を命じた、という點である。

從來、『玉臺新詠』といえば、宮體詩流行の流れに沿って編まれたもの、という認識が強いようである。しかしわたくしは、宮體詩の流行に一定の歯止めをかけようとしたのが『玉臺新詠』ではないか、と考えている。『玉臺新詠』は、艷詩が脆弱で淫靡な方向に流れるのを誡め、艷詩の本當のよさを示すために編まれたのではないだろうか。確かに、『玉臺新詠』にはなまめかしい詩が少なくない。しかし、過度に淫靡な詩はほとんどない。蘼蕪の詩を含む「古詩八首」などは、非常に眞面目な作品である。嚴羽はすでにその點に氣づいていたのであろう。次のように述べている。

或者但謂纖豔者爲玉臺體、其實則不然。

或る者但だ纖豔なる者を謂ひて玉臺體と爲すも、其の實は則ち然らず。（『滄浪詩話』詩體）

徐陵の「曾ち雅頌を忝すこと無く、亦風人を濫すこと靡し」という言葉は、從來輕くみられている。しかし、この自信に滿ちた發言は無視できないし、決してタテマエ論ではないように思う。

結　語

それでは最後に、いわゆる「古詩」について述べて結びとしたい。

蘼蕪の詩は、『玉臺新詠』の性格を考える上で重要である。と同時に、「古詩」の性格を考える上でも重要な意義をもっている。蘼蕪の詩に「婦人の四德」の思想が流れているとすれば、見方によれば、倫理的、道德的な詩だとも言える。といっても、決して惡い意味ではない。

鈴木修次氏は、蘼蕪の詩を「非情の文學」、すなわち、「人間の當爲への努力や良識にもとづく生活道德に對して水をさす」ような文學、の一例として擧げ、次のように言う。(14)

下世話の興味の對象となりうる話しがらであるとはいっても、これまた非常識的で、それなりの非情さを感ずる。……作品の中心をなす部分は、新舊の女の比較をこころみるところにある。……新舊の女の比較は、古詩、古歌において始めてとりあげられた題材であろう。そうした題材が文學の對象としてとりあげられたということは、一面からすれば、文學感情の自由な開放が庶民的世界においてしだいに活潑に行われようとしたためであるということも、可能であろう。

この詩に「文學感情の自由な開放」をみる考え方は、わたくしのそれとは正反對である。そもそも、「古詩」として傳わる漢代無名氏の五言詩は、表現の面からも、内容の面からも、高度の知的教養を備えた人でなければ作れなかったと思われるものが、ほとんどである。蘼蕪の詩を「庶民的世界」の產物と考えるのはやはり無理がある。む

しろ、「庶民的世界」とは縁遠いものと言えるのではないだろうか。

「『玉臺新詠』は女性に是非讀んでほしい」と言ったのは、編纂者の徐陵である。[15] 女性はいかにあるべきか、その一つの理想像が蘼蕪の詩に描かれている。このような理想的な女性ですら、男に棄てられてしまったのである。女性というものは、やはり不幸なのかもしれない。しかし、女性には男にはないよさがある。男に棄てられた女性の情愛を細やかに描き、女性の美しさ・すばらしさを巧みに寫し出したのが豔詩であり、それを集めたのが『玉臺新詠』であるとすれば、蘼蕪の詩は、その卷頭を飾るのに、最もふさわしい詩だったのである。

註

(1) 『樂府』散曲』(筑摩書房・中國詩文選二二) 五八頁。
(2) 『魚玄機・薛濤』(集英社・漢詩大系一五) 八四頁・下注。
(3) 劉讓言等選注『中國古典詩歌選注一』(甘肅省人民出版社) は次のように言う。
　〝姝〟與上一句的〝好〟、都是對一個人的總評、是綜合了各方面的優點來說的。(一九〇頁)
(4) 內田泉之助『玉臺新詠上』(明治書院・新釋漢文大系六〇) 四〇頁。
(5) この文を、「言は愔愔ならずと雖も、道の突兀なるに似て……」と讀む說もある。
(6) 手如柔荑、膚如凝脂。
　領如蝤蠐、齒如瓠犀。
　螓首蛾眉。
　巧笑倩兮、美目盼兮。(『詩經』衞風「碩人」)
(7) 娥娥紅粉粧、纖纖出素手。(其二)
　纖纖擢素手、札札弄機杼。(其十)
(8) 余冠英(『樂府詩選』・『漢魏六朝詩選』) の說。
　小西昇氏(『漢代樂府謝靈運詩論集』一四頁)・田中謙二氏(前揭書五五頁) も、この說をとっている。
(9) 山田勝美・阿部正次郎兩氏『中國文學における悲愁詩』一五頁。
(10) この點については、藤原尙氏「班固の賦觀」(『廣島大學文學部紀要』第四一卷) を參照。
(11) 吉田猛氏「『玉臺新詠』の成立について」(『立命館文學』

第四三〇・四三一・四三二號）が詳しい。

（12）『玉臺新詠索引』（山本書店）解説。

（13）『六朝詩の研究』（第一學習社）三一五頁。

（14）『漢魏詩の研究』（大修館書店）四二一・四二二頁。

（15）方當開茲縹帙、散此縉繩、永對翫于書惟、長循環於纖手。
孌彼諸姬、聊同棄日。猗歟彤管、無或譏焉。
（徐陵「玉臺新詠序」）